

○坂本 悠・森 一幸<sup>1)</sup>・渡邊 亘<sup>2)</sup>・松尾祐輝・尾崎哲郎<sup>1)</sup>・茶谷正孝  
 (長崎農林技開セ馬铃薯・<sup>1)</sup>長崎県農林部・<sup>2)</sup>長崎五島振興局)

【目的】

バレイショは長崎県における主要作物の1つで、その生産量は全国2位であり、春秋の二期作栽培が広く行われている。本県では近年、ジャガイモシストセンチュウおよびそうか病に強く、多収で外観品質が良い品種「さんじゅう丸」(2012年7月品種登録)を育成した。

秋作普通栽培は、春作マルチ栽培に比べ収量性が劣ることが一般的であり、栽培面積も少ない。「さんじゅう丸」においても秋作普通栽培で収量性が劣るため、普及面積を拡大する上では秋作普通栽培における収量性を向上させる必要があると考えられる。

一方で、秋作普通栽培におけるバレイショは春作マルチ栽培よりでん粉価が低い傾向がある。特に「さんじゅう丸」は秋作普通栽培ではでん粉価が8~9%程度と低く、やや水っぽい食感となる。そのため、「さんじゅう丸」は、秋作普通栽培におけるでん粉価を向上させる必要があると考えられる。

そこで、生育期間を長く確保し、秋作普通栽培における収量性とでん粉価の向上を図るため、植付け時期およびかん水効果の検討を行った。

【材料および方法】

本試験は2013~15年に当研究室圃場(長崎県雲仙市)で実施した。供試品種は「さんじゅう丸」とし、県内春作産種いもを用い、慣行植付け時期の9月上旬および早植え時期の8月下旬に植付け、11月下旬に収穫した。施肥量(kg/a)はN:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=1.4:1.12:0.84、栽植密度は666株/a(畦間60cm×株間25cm)とし、植付け後にかん水した。かん水はかん水チューブを用いて行い、かん水量は1回あたり2t/a、かん水日は土壌水分量が圃場容水量の45%(多かん水区)、30%(少かん水区)を下回った日とした。生育期間中に萌芽期(萌芽した株が調査株の半数を超えた日)を調査し、収穫後に収量性およびでん粉価を調査した。

【結果および考察】

出芽期は、早植えやかん水することで有意に早くなり、特に早植えすることで慣行植え・無かん水(慣行区)より2週間以上早くなった。上いも数は、早植えやかん水による効果は見られなかった。収量は、早植えすることで慣行区より有意に増加し、特に早植えした上でかん水することで、慣行区の約1.5倍の収量となった。1個重は、早植えすることで慣行区より有意に増加した。でん粉価は、早植えすることで慣行区より有意に増加した。

したがって、「さんじゅう丸」では早植えすることで、出芽期が早くなり、生育期間を十分に確保でき、1個重の増大による増収および品質向上を図ることができると考えられる。

ただし、高温下での栽培で青枯病が発生しやすくなるため、本病発生圃場では「さんじゅう丸」を早植えすることは避ける必要がある。

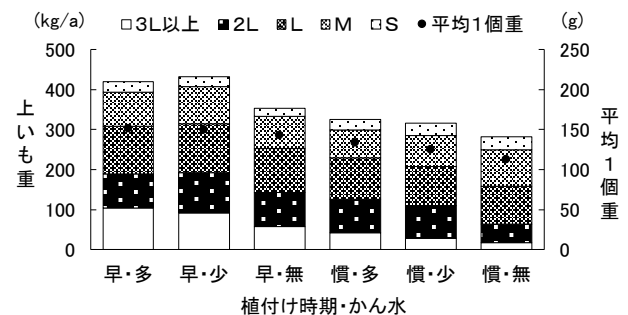


図1 植付け時期およびかん水頻度の違いによる階級別重量と平均1個重

表1 植付け時期およびかん水頻度の違いによる生育および収量性の違い							
植付け時期	かん水	出芽期(月/日)	上いも数(個/株)	収量(kg/a)	対標比 <sup>1)</sup> (%)	1個重(g)	でん粉価(%)
早植え	多	9/15	4.1	419	153	151	10.0
	少	9/16	4.3	432	155	149	9.7
	無	9/17	3.7	353	129	143	9.8
慣行植え	多	9/24	3.6	325	116	133	9.0
	少	9/28	3.7	316	110	124	9.5
	無	10/1	3.7	281	100	113	8.5
植付け時期		**	n.s.	**	-	**	**
かん水		**	n.s.	n.s.	-	n.s.	n.s.
交互作用		n.s.	n.s.	n.s.	-	n.s.	n.s.

注1) 対標比は、各品種の慣行植え、かん水無し区を100とした値  
 2) \*\*:1%, \*:5%水準で有意差あり, n.s.:有意差なし(二元配置分散分析)